

こだわりにこだわる

田中三保子

日常の保育の中での子どもの「こだわり」について考えてみると、二つの側面があるよううに思う。それについて実例をあげて考察してみたい。

えてしまふか、きっとそんな器用なこともできないから、さっさとこの世界から足を洗つていただろう。めんどうな「こだわり」に足をつこんで、小人の目と足をもつて、地下のミクロの旅をすることなどなかつただろう。適当な距離から面白がつて見ていてもらえたから、小人はいい気になつて「こだわり」を歩いてこれたのではないか。そう考へると、教育されなかつたわけではないけれど、それ以上に、私はいい形で「保育」されたのではない、かと思う。「保育」の原義も知らないまま、いのちは不遜だけれど、その子が今持つっているものを保ちながら、そこから育つていくのを助けるのが「保育」であるとする、私はいい年をしていい保育を受けたような気がする。そのおかげで、自分の視線や感覚を保ちつつ育んでいくような「こだわり」を、どこかでひつそりと楽しんでいられるのだ。

(聖学院大学講師)

特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

〈事例1〉

A夫が珍しく私のところにやってきた。「手に爪のついたのが作りたい」という。具体的な形がわからないので、あれこれ聞きながら作ってみる。手甲（てっこう）に三本の長い爪がついたようなものらしい。人の爪のように丸みを帯びていて、なおかつ先端が内側に曲がっているのがいいのだという。ボール紙を湾曲させて微妙な曲線を作るのにちょつと手間どる。紙の目に逆らう方向はきれいに曲げにくいからだ。私が試みる間、A夫は額に綻じわを寄せてじっと手元を見ている。爪の曲がり具合が気になるらしい。それらしいものが一つできると、顔がぱっと輝いた。そして「もう一つ作っておいてね」と念を押して、安心したように遊びに行った。その後で男の子が二人、A夫と同じものが欲しいといってきて、今度は私が曲がり具合にこだわって作ったのだが、彼らはそんなことよりも、少しでも早くできることの方にこだわっているようであった。

A夫は爪の微妙な曲がり加減にこだわった。彼がもう少し年少であつたなら、その後で同じものを欲しがつた子ども達のように、「似たようなもの」で満足してくれたかもしれない。A夫にははつきりしたイメージがあつて、細かいところまで見分けているからこそこだわったのだ。細部にこだわるということは、それを弁別する力が育つてることを示しているといえよう。子どものこだわりをきちんと受けとめ、その意味するところを理解

してイメージが実現できるように対応していくことは、子どもの気持ちに添うというだけでなく、持てる力を伸ばすという意味でもきわめて大切なことだと思う。やりたいという意欲をもっているその時に、やりたいことがうまく実現できれば、子どもは達成感、満足感を味わい、また新しいことに挑戦しようという気持ちになる。そしてまた、新たな遊びに意欲的に取りくんで、いくうちに、自分の力を伸ばしていくのだと思う。保育者としては、子どものこだわりに気づく感性をもち、ひとつひとつを大事に考えて誠実に応えていくことが必要なのであるまいか。

事例2

B夫は三歳で入園してきた。泣いて母親にしがみつき、なかなか慣れなかつた。登園したときすぐに抱きとるようにすれば泣きやむようになつたが、今度はエプロンをいやがりだした。母親は毎朝入口でなんとかつけさせようとするのだけれど、激しく抵抗する。朝の手洗いとうがいもやろうとしない。

私は、B夫が幼稚園といいう新しい集団の一員になることを拒否しているように感じられた。母親の実家でのたくさんの大人に囲まれた暮らしから、ある日突然、自分の意思とは無関係に、二〇人の子どもに大人が一人という生活に放り込まれて、こんなところには入りたくないと彼なりに抵抗しているのであろう。それをエプロンやうがいにこだわると

特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

いう形で表現しているのだと思われた。

男の子のなかには今までつけたことのないエプロンをいやがる子がときどきいる。けれども幼稚園の生活が近いもの、好ましいものになつてくると、こだわりがとれて特別なことと感じなくなるようである。私はB夫に一方的に集団の規範を押しつけたくないと思った。B夫がいつか自分から受け入れてくれるのを待ちたかった。エプロンは母親から受け取つてコートかけにかけておき、帰りに一応促してみることにした。B夫はアトピーがあつて手の皮がところどころむけている。それもあつて手を洗いたくないのだろうと思い、手洗いは彼の手をとつてそつと水をかける程度にし、うがいをいやがれば、コップはさりげなく元に戻すことを繰り返した。

そのうちに、こんどはいつの間にか靴と靴下を脱ぎ捨てるようになった。だんだん暑くなつてきたし家では裸足であろうから、その方が気持ちがよいとは思う。帰り際に履かせようとしてもいやがついていたのだが、ひと月ほどすると、靴下と靴は履いてくれるようになつた。六月半ばのある朝、登園してきたときに母親に言われた。「今朝はエプロンをしていることに気がついていません」。その日から不思議にB夫はエプロンに全くこだわらなくなつた。うがいも、一学期末には私がコップを手渡せばするようになつた。

初めから何のこだわりももたなければ、B夫は幼稚園生活をもつと楽しめたのに違いない。それでもこだわらざるをえなかつたのである。私としては、B夫がこだわっている

ことを事実としてそのままに受けとめ、彼のこだわりにつきあっていこうと思つていた。彼は、なじんではこだわりを捨て、こだわりを捨てることでまたなじむことを繰り返して、少しづつ新しい集団に溶けこんでいったのだと思う。

保育の中では、毎日たくさんの子どものこだわりに出会う。1のような事例の場合には、とっさにはどう応じたらよいのかわからず困惑してしまうことも多い。子どものイメージしているものを知らなかつたり、知つてもそのままでは実現が難しい場合もある。限られた状況や材料の中で、子どもの技量に合わせて実現するにはどうしたらよいかを、子どもと一緒に探りながら工夫してみることになる。そしてうまくいって、子どもが喜びを表現してくれたとき、私自身も達成感、充実感を味わうことができるのである。

事例2のようなこだわりは、子どもの内面に深くかかわっている。原因や理由はよくわからないことが多い、簡単にどうにかなるものでもない。その子がこだわらざるをえない気持ちを受けとめて、できれば穏やかに過ごせるような方策を探りつつも、心の揺れはそのままに根気よくつき合っていく。そうしていつか、その子がこだわらなくなっているときに気づいたとき、保育者としての大きな喜びを味わうことができる。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)